マイトリーヘルプサービス・２０２３年７月「日本文化の学び」

「夏の涼味―かき氷」

佐伯　仁

氷の神の威力を崇め感謝・・・

七月。炎暑の候。暑さも本格的…会いたくなるのは夏の涼しい顔。

遠い王朝の昔も夏は暑い…枕草子が「あてなるもの」（上品な物・４２段）に挙げているのが「削った氷に甘味料を注ぎ、金属の器で飲む」とある。

源氏物語（蜻蛉）では女房達が貴重な氷と戯れる姿を描いている。

それ以前、奈良初期、朝廷では氷室（ひむろ）に貯えた氷を暑い夏に家臣へ授ける氷室節句を催す。氷結する氷の神の神威を仰ぎ、その力を賜わりたいと祈ったからに違いない。氷室とは天然の氷を夏まで保存しておくために設けた石造りの小屋または穴をいう。

江戸期、六月一日、この貯蔵氷を家臣へ配り夏の息災を促した。また加賀藩でも城内の氷室に貯えた雪を「白山水」と名付け、徳川家へ献上。藩内の庶民も氷室饅頭を創案し、縁起物として夏の贈答品にした。

現在、氷神を祀る氷室神社（奈良）では五月一日、全国の製氷業者が祭祀を行っている。

明治期、文明開化と共に外国人居留地が開設され、高価な輸入氷が登場。これに対し、明治二年（一八六九）に函館五稜郭の外堀の天然氷を日本の商人は国産の「函館氷」として発売。

同じ明治二年、横浜馬車道では「氷水屋」が開店。販売していた「あいすくりん」がアイスクリームの始め…　この地には記念像もあり、過ぎた夏の日を懐しんでいる。

日焼顔　見合ひて　うまし　氷水　　水原秋櫻子

台湾かき氷